

# 永井隆はなぜ原爆死が神の摂理だと強調したのか？

—「ケガレ」から考える試み—

岡 本 洋 之

## 1. 本研究の目的と方法

### a. 「浦上燔祭説」——永井隆が提起した

#### 長崎原爆死への解釈——

燔祭のほのほの中にうたひつつしらゆりをとめ燃えにけるかも——これは、永井隆(1908〈明治41〉～1951〈昭和26〉)が、戦前に軍事教練を担当するなど親しく関わっていた、長崎市の純心高等女学校生徒の原爆死を詠んだ短歌である。この歌は、一瞬にして筆舌に尽くしがたい姿にされ、生命を奪われていった生徒たちが、実は神に捧げられる生贄として美しく死んでいったのだ、という内容だと解せられる。後述するように永井のこの考え方は、思想界で論争を引き起こした。本研究はこれを受け、教育者である彼が行った長崎における原爆死への宗教的意味づけを、「ケガレ」というキーワードを用いて解釈することが可能ではないか、という見解を提起するものである。

日本の2つの被爆地の地域性はまったく異なるため、「怒りの広島、祈りの長崎」とも表現されるほどに、両地における原爆死の捉え方と平和運動は大きく異なってきた。

このうち長崎市の特徴としては、(1)1570(永禄13、元亀元)年の開港以来、交易港として一貫して海外との文化交流の窓口でありつづけてきた、(2)多数のキリシタンが、禁教期に北郊・浦上の山中に隠れ住み、しばしば弾圧を受けた(とくに1867〈慶応3〉～1873〈明治6〉年の「浦上四番崩れ」では浦上山里村のほぼ全員が配流され、600名以上<sup>(1)</sup>が獄死している)、(3)浦上キリシタンおよびこの系統のカトリック信徒

は、総じて長崎港を中心とする市中心部の住民から差別される存在であり<sup>(2)</sup>、この傾向は現在もなくなったとはいえない<sup>(3)</sup>、ということがあげられる。

この長崎への、1945(昭和20)年8月9日の原子爆弾投下には、複数の偶然的要素が絡んでいた。それは、(1)原爆は、投下第1目標であった小倉の悪天候のため、急きょ第2目標の長崎に投下された、(2)投下は長崎市中心部を狙って行われたが、強風のため爆弾が北西よりやや北寄りに3.4 km流された結果、カトリック教徒が多い浦上地区の、しかも浦上天主堂のほぼ上空で炸裂した、の2点である<sup>(4)</sup>。同天主堂はかつての禁教期、毎年正月に絵踏が行われた庄屋敷跡、つまりキリシタン系の人々にとって先祖の苦難を象徴する地に建てられたものである。その頭上に、キリスト教が支配的宗教である米国が爆撃機を送り出した結果、信徒1万2千人のうち8千5百人が死亡したのである<sup>(5)</sup>。

このことは、原爆による被害が相対的に軽かった長崎市中心部住民による、信徒への差別強化をもたらした。医師で長崎医科大学(現・長崎大学医学部)教員であり、のち作家となった永井隆は小説『長崎の鐘』中で、実在の人物・山田市太郎(のち原爆被爆者遺族会長)に次のように言わせている。「誰に会うてもこう言うですたい。原子爆弾は天罰。殺された者は悪者だった。生残った者は神様から特別の御恵みを頂いたんだと。それじゃ私の家内と子供は悪者でしたか!」<sup>(6)</sup>(ここでいう「神様」は、事実の

流れと小説の文脈からみてキリスト教の神ではなく、神道の神である)。浦上カトリック信徒にさえも、「原爆は天罰なのだ。神はわれわれの罪を罰したもうてわれわれの家族を殺し、教会をさえ焼きたもうた」という声があった<sup>(7)</sup>。

浦上信徒がはかりしれない精神的打撃を受けるなかで、永井が編み出したのが、「原子爆弾が浦上に落ちたのは大きな御摂理である。神の恵みである。浦上は神に感謝をささげねばならぬ」<sup>(8)</sup>という「浦上燔祭説」(高橋真司の命名<sup>(9)</sup>)である。1945年11月、永井は浦上信徒の合同追悼祭で、次の文を含む弔辞を読んだ。

終戦と浦上潰滅の間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人類の罪惡の償いとして日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やされるべき潔き羔(こひつじ)として選ばれたのではないのでしょうか？

智恵の木の実を盗んだアダム罪と、弟を殺したカインの血とを承け伝えた人類が同じ神の子でありながら偶像を信じ愛の掟にそむき、互いに憎み互いに殺しあって喜んでいた此の大罪惡を終結し、平和を迎える為にはただ単に後悔するのみでなく、適当な犠牲を献げて神にお詫びをせねばならないでしょう。これまで幾度も終戦の機会はあったし、全滅した都市も少なくありませんでしたが、それは犠牲としてふさわしくなかったから神は未だこれを善しと容れ給わなかったのでありましょう。然るに浦上が屠られた瞬間初めて神はこれを受け納め給い、人類の詫びをきき、忽ち天皇陛下に天啓を垂れ終戦の聖断を下させ給うたのであります。

信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦争中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶

やさなかったわが浦上教会こそ神の祭壇に献げらるべき唯一の潔き羔ではなかったのでしょうか。この羔の犠牲によって今後更に戦禍を蒙る筈であった幾千万人の人々が救われたのであります。

戦乱の闇まさに終り、平和の光さし出づる八月九日、此の天主堂の大前に焰をあげたる嗚呼大いなる燔祭よ！ 悲しみの極みのうちにも私らはそれをあな美し、あな潔し、あな尊しと仰ぎみたのでございます。汚れなき煙と燃えて天国に昇りゆき給いし主任司祭をはじめ八千の靈魂！ 誰を想い出しても善い人ばかり。[中略]

「私らは」あの日あの時この家で、なぜ一緒に死ななかったのでしょうか。なぜ私らのみかような悲惨な生活をせねばならぬのでしょうか。私らは罪人だからでした。今こそしみじみ己が罪の深さを知らされます。私は償いを果していなかったから残されたのです。あまりにも罪の汚れの多き者のみが神の祭壇に供えられる資格なしとして選り遺されたのであります<sup>(10)</sup>。

永井がこの弔辞を読むと、参列者は「肩をふるわせて泣いた」<sup>(11)</sup>。それは弔辞が、(1)肉親の死が天罰ではなく、神の前での意味ある「潔き」死であったこと、(2)生きて、宗教的に言えば地上に神の国を建設することが、残された者の任務(生きがい)であること、を宣言したことにより、多くの信徒が励まされたからであったと考えられる<sup>(12)</sup>。

#### b. かみあわぬ「浦上燔祭説」評価論争

「浦上燔祭説」は多くの議論を呼び起こした。1960年代には医師・秋月辰一郎(1916〈大正5〉～2005〈平成17〉年)が、「ついていけない」という心情を吐露した<sup>(13)</sup>。70年代には詩人・山田かん(1931〈昭和6〉～2003〈平成15〉)が、

「『原爆』の内質としてある反人類的な原理をおおい隠すべき加担にはかならず、民衆の癒しがたい怨恨をそらし慰撫する、アメリカの政治的発想を補強し支えるデマゴギー」と、長崎在住の被爆者としては初めて本格的に永井を批判した<sup>(14)</sup>。

80年代には作家・井上ひさし（1934〈昭和9〉～2010〈平成22〉）が、「永井説に拠るならばアメリカは原爆投下を正義の行いであったと強弁できる」、「神の摂理を持ち出せば人間世界から責任者を出さずにすむわけだ。為政者にとってこんな都合のいい話はない」と、同じく辛口で永井を批判した<sup>(15)</sup>。90年代以降には哲学者・高橋眞司（1942〈昭和17〉～）が、「『浦上燔祭説』は、それを東西冷戦や戦後政治のより大きな社会的文脈の中に置くとき、その歴史的意義は戦争責任と原爆投下責任の二重の責任を免除するところにある。否、そればかりでなく、原爆投下の是認、ひいては原子爆弾そのものの肯定に道をひらく」と、長崎の地から批判を展開した<sup>(16)</sup>。

これらに対し永井を擁護したのは、まず70年代の『カトリック・グラフ』誌であった。90年代以降には日本史学者・片岡千鶴子（1937〈昭和12〉～）が、「カトリックの教えの根本は、イエズス・キリストは人間を救うためにこの世に生まれ、十字架の苦しみによって人間の罪を贖い、復活によって永遠の生命をもたらしてくださった、ということにある。そして人間は自分の苦しみをこのキリストの苦しみに合わせることによってキリストの救いの業に参加し、キリストと共に人類の協贖者となることができる」と説き、永井の言葉は「神は浦上にキリストと共に人類の協贖者になることをお求めになった」というスタンスに立つ「深い宗教的自覚からくる呼びかけ」だと述べた<sup>(17)</sup>。永井の言葉が原爆投下を容認したとする批判に対しては、「被爆直後、終戦直後のあの時代に、しか

も信徒の励ましに心を砕いている永井に、戦争責任や原爆投下責任の免罪などということを考える余地があっただろうか。こうした批判は非現実的だ」、「第一、永井の全作品に一貫する反原爆、戦争反対の叫びと、つじつまが合わない」と反駁する<sup>(18)</sup>。

また同時期に元長崎市長・本島等（1922〈大正11〉～）は、カトリックが「四番崩れ以来、極貧の中に生きて、スパイや非国民とののしられ、一生懸命戦争のため働いて、そして原爆被爆。神社に参らなかつたから、外国の宗教を信じたから、原爆は天罰だといわれ、親も、兄弟も、子供も被爆死、完全に心身共に打ちのめされた」と指摘したうえ、信徒を「激励し、希望を与え、神への愛と信頼をとりもどすために、ほかにどんなことばがあったらうか」と永井を擁護し、弔辞を次のように解釈する。「浦上は神様に選ばれた民だった。みんなに代わってわれわれが犠牲になったのだ。われわれが、みんなの悲しみや苦しみを引き受けたのだ。不正義の戦争に勝利があるだろうか。〔中略〕世界平和が再来し、日本の信仰の自由が許可されたのだ。神のみ摂理、神の恵み、神に感謝」<sup>(19)</sup>。

この論争を見ると、永井説を否定的に評価する側がその政治的な位置づけを問題にする一方、肯定的に評価する側は信仰の論理から正当性を主張<sup>(20)</sup>しており、論点のかみ合い方がいまだ不十分だといわざるを得ない。しかし「浦上燔祭説」否定論者も永井が残した医学的記録の価値については肯定し、肯定論者も永井の思想と行動には若干の疑問を投げかけている<sup>(21)</sup>ことから、論争は理性的に行われてきたといえよう。

### c. 永井の原爆死観が日本社会に問いかける ものを見出す——本研究の位置づけ——

論争を受けて2000（平成12）年8月5日付『長崎新聞』は、山田・高橋・片岡・本島の4氏の

論が、立場の違いにかかわらず、(1)「浦上燐祭説」の背後にあるカトリック差別の存在、(2)永井が放射線専門医師としての知識を発揮して被爆者治療に没頭し、正確で詳細な被爆・救護記録を残したことへの高い評価、(3)永井が原爆の恐ろしさを訴え、戦争反対・恒久平和を長崎から世界に向かって叫び続けたことへの高い評価、の3点において共通していることをあげ、今後の研究課題を「論争は、永井の真意や人物評価に関する主張を一方的に提示する方法で行われてきた。だが、永井を通じて社会や思想の多面的な考察を目指す立場に立ち、協力して補完し合うなら、議論は飛躍的に深化することだろう」と述べている（傍点は岡本、以下同じ）<sup>(22)</sup>。

本研究はこれを受け、永井の著作や私信等を検討する方法により、新たな永井像を提起することを通じて、彼の原爆死観が日本社会に問いかけているものを見出すことを目的とする。それにあたり、日本社会の根本問題ともいべきケガレ意識との関わりに注意しながら考察を進める。

## 2. 新たな永井像の提起

### a. 迷信やケガレを批判的にみていた可能性

——長崎医大入学まで——

永井は島根県出雲地方の医師の家系に生まれた。先祖は松江藩の小禄の武士であったが、祖父の代に分家して農村で漢方医を業とするようになる。父・寛（のぶる）は独学で医師の国家試験に合格し、隆が生まれた1908（明治41）年には松江市の開業医の代診を務めていた。同年寛は同地方の飯石郡飯石村（現在の雲南市三刀屋町）に招かれて開業し、隆はそこで育つ<sup>(23)</sup>。のち彼は晩年まで故郷の友人との親交を保ち続けるが、一方では1951（昭和26）年、死の3か月前に両親をモデルにした小説『村医』<sup>(24)</sup>を書きあげている。以下は村でそうめん流しが行わ

れた直後にジフテリアが流行した場面である。

加茂神社の神主あたりから、流されたのであろうか、こんなことがしきりに村人の間で言われていた。それは、ジフテリアとか何とか、これまで聞いたことのない西洋の病気がこの村へ入りこんだのは、あの村医の奥さんが、いろいろ西洋人のまねをし、肉料理などをさかんに食うから、それについて入って来たのだ……と。

—— こういうわけで、[村医である主人公の] 登夫婦の評判はさんざんだった。ある時は、村の旦那衆からおどかされ、ある夜は、大勢の村人から家に石を投げこまれた。

けれども登たちは一步も退かなかった。人間の命よりも大切なものはない、と聞いていたからである。そうして、子供の命も大人の命もまったく同じく尊いと思っていたからである。その尊さには、地主と小作人の差別もなく、村長と旅順やもめの孫の間にも差別がない、と知っていたからである。

この間に、青山不動の先生[村の祈祷師]は、いいもうけをしたとの話であった。先生は、自分でジフテリアが祈りでは治らぬことをすぐ知ったから、もっぱら予防の祈りをやって村の中をまわった。これはたしかに当たった。ジフテリアは空気伝染なので、まったく思いがけない時に、思いがけない子供が苦しみ出す、それは、科学知識のない村人にとっては、たしかに悪霊の仕業に思われた。それで先生を呼んで悪霊がわが家へ来ないように、門口にごま壇を設けて、先生をお招きするのだった。

せっかく予防の祈りをしてもらったにもかかわらず、子供がジフテリアにかかる家もあったが、それを聞くと先生は、その子

はいたずらで、せっかく祈りをしてやったのに、その後で悪霊を怒らすようないたずらをやったんだ、といかにも残念そうに言った。村人はそれで納得した<sup>(25)</sup>。

主人公の村医夫妻は、農村に根を張る迷信ないし、悪霊に表れている村人のケガレ観念に苦しみ、これと徹底して闘う。そこで、永井が幼少期から両親の姿を見て、迷信やケガレ観念を批判的にみていた<sup>(26)</sup>と仮定すると、これから述べるように、彼の生涯における不可解な点や、先行研究で不明とされていた点の多くがかなり説明可能になる。

まず松江高等学校時代の彼が、「唯物主義」と称する精神活動軽視の風潮に傾倒したことは、迷信への反発の結果、目に見えぬものの存在を信ずる宗教一般を否定するに至ったことを意味するものと思われる。

また同校を優等で卒業した彼が、なぜ東京帝大を目指さず長崎医大に進んだのかは、今も不明とされている。しかし長崎が近世において、西洋科学を取り入れる窓口であり、かつ日本各地から多くの医師が遊学した先であったことを考えると、彼が同地を迷信とは無縁な地かもしれぬと見え、進学先の一候補にしても不思議はない。

#### b. ケガレ意識打破への鍵を見出す(1)気品をもって生きる——キリシタン系カトリックとの出会い——

永井が1928(昭和3)年に入学した長崎医大は浦上にあり、周辺にはキリシタン系カトリック教徒が居住している。この人々に関しては次のことがいえよう。

(1) 幕末まで、出島と唐人屋敷に住む外国人に食肉を供給するため、浦上キリシタンが屠畜業を営んでいたこと<sup>(27)</sup>から、キリシタンはケガレた存在とみられていたと考えられ

る。

(2) 禁教期の九州各地では毎年正月、「キリシタン邪教観を浸透させるための洗脳作業」(片岡弥吉の表現)である絵踏が執拗に繰り返されたが、長崎市街地の住民は、絵踏が終わるたびに音曲を伴う酒盛りや芸人による「万歳舞」などの厄払いをした。これが年中行事として行われたことにより、聖画像を踏むと何らかの不吉なものが踏んだ者に伝染するからこれを落とさねばならぬという考え方が、固定化されたであろう。片岡弥吉はこの厄払いを説明する際に「ケガレ」の語を用いてはいない<sup>(28)</sup>が、日本では一般に、ケガレは単なる観念ではなく、伝染する実体とみられてきたこと<sup>(29)</sup>を考え合わせると、この厄払いはケガレに感染することを嫌悪したものだと解釈できよう。

(3) 斎藤茂吉(1917〈大正6〉～1921〈大正10〉)に長崎医学専門学校教授の「西坂を伴天連不浄の地といひて言継ぎにけり悲しくもあるか」という短歌<sup>(30)</sup>は、1597(慶長元)年に豊臣秀吉の命により、京・大坂で捕えられた日本人キリシタン26名(カトリックでは「日本二十六聖人」とされる)が処刑された地である西坂(長崎市内に現存する地名)が、単なる刑場ではなく「伴天連不浄の地」、すなわちキリシタンのケガレに染まった地として、近代になっても長崎の人々の記憶にとどめられてきたことを示す。

永井はこれらに表れている、キリシタンないしカトリックをケガレたものとみる強固な差別意識と、それでも自らの信仰を恥じない信徒に出会ったと考えられる。彼が、キリシタン帳方<sup>(31)</sup>の家系であり家畜仲買を生業とする森山家に、いったんは断られたにもかかわらず再度押しかけてまで下宿した理由の一つは、差別される立場にあっても堂々と生きる信徒に強くひかれたからではないか。そうならば永井は、ケ

ガレたとされる者が気品をもって生きることが、ケガレ意識ないし迷信を払拭するうえで重要だと考えたものと思われる。

1933（昭和8）年、「満州事変」に軍医として出征した永井は、翌年の帰還後に受洗し、次いで森山家の娘・緑と結婚する。1937（昭和12）年、彼は「日華事変」に再び軍医として出征し、3年後に帰還して以後は、長崎医大物理的療法科（今日の放射線科）助教授として研究と教育に従事する。その間1945（昭和20）年6月、放射能障害による白血病で余命3年と自己診断する。

c. ケガレ意識打破への鍵を見出す(2)科学の発達——「浦上燔祭説」を唱えた理由——

永井は前述した浦上信徒合同追悼祭弔辞において、被爆死者が「潔き羔」であると繰り返し、「燔祭」に擬した原爆の炎を「あな美し、あな潔し、あな尊し」と讃え、大火の猛煙を「汚れなき煙」と表現した。また彼は原爆死した妻が原子雲の上で昇天する絵<sup>(32)</sup>を描いたほか、カトリック校である純心高等女学校の、原爆死した生徒を「天主をたたえる歌をうたいつつ、炎より熱い信仰に燃えて、天に昇りゆく純潔の子よ。召されたる汚れなき子羊よ」と讃え、前述のように「燔祭のほのほの中にうたひつつしらゆりをとめ燃えにけるかも」と詠み、色紙や短冊にも書いている<sup>(33)</sup>。

しかしこの「潔し」・「汚れなし」の語の使用や、原爆死の徹底した美化は、信仰の論理からだけで説明できるとは思えない。被爆直後の永井は、原爆を作るほどに発達した科学技術に、早くも焼け跡の上で感心をもしていたのであり、それをふまえてこれらの語の意味を考察すべきだからである。

永井は、十数年をかけて蓄積した研究資料が原爆の炎に包まれ、翌日それらが灰と化しているのを見て「地獄へでも突き落とされたかのよ

うな絶望」を抱く。「が、その絶望は半日も続かなかった。私はまったく新しい希望をたちまち抱くことができたからであった。その新しい希望とは、……目の前にあらわれたまったく新しい病気、これまでどこにもなかった病気、古今東西の学者がまだ見たことのない病気、私たちが医学史上最上の観察者として選ばれた病気——原子爆弾症！ この新しい病気を研究しよう！ そう心に決めた時、それまで暗く押しつぶされていた心は、明るい希望と勇気にみちみちた。私の科学者魂は奮い立った。[中略] おびただしい原子爆弾症患者、さまざまな症状、相次ぐ死亡者、それをなんとかして助けようと考へに考へを重ねる苦悩。医学者の生きがいをこの時ほどいたく感じたことはなかった」<sup>(34)</sup>。

これは永井が、妻の安否確認を後回しにし、その死を推測しつつ自らの負傷をおして救護活動に奔走していた時の心情である。こうでもして自分を奮い立たせなければ、彼自身が倒れる状態だったのであるから、この記述内容の倫理性を問うことはできないが、科学への飢え渴いた欲求は確認できる。

その科学者魂をもって、やがて焼け跡で彼は、原爆の威力とその意味について子息の誠一（まこと、1935〈昭和10〉～2001〈平成13〉）と語り合う。「すごい力だったなあ！ と今でもやっぱり感嘆する。たったの一発で、これだけの広い町が、のっぺらぼうの原っぱに変わっちゃったのだ。『ここではじけたこの原子爆弾の物語の意味はいろいろある』私はしずかに語り始めた。『このたびの戦争は、資源の奪い合いがその主な原因の一つだった。[中略] 原子爆弾は人類に、まったく新しい資源の在ることを教えてくれた。[中略] 人類生存の前途には絶望の黒岩が立ちふさがっていた。——その岩をあの原子爆弾は吹き飛ばしたのだった。原子爆弾の吹き飛ばした穴を通して、新しい世界の光が射し出すのを人類は見た。この穴から入って

探せば、新しい動力はいくらでも取り出せるぞ、新しい物資はいくらでも引き出せるぞ、という明るい希望が人類の胸に湧いた。万物は原子から成り立っている。〔中略〕この原子の内に神は天地創造以来こんなすばらしい力を隠していたのだ。しかもそれを探し出し、取り出し、利用する知恵も人類に与えてあったのだ〔後略〕』<sup>(35)</sup>。

原子を「探し出し、取り出し、利用する知恵」とは、原子力関係をはじめとする科学技術を指している。永井は原子野のまっただ中で、自分の妻を含む無数の人々を死体に変え、自身をさえ何度も危篤に追い込んだ原爆を生んだ科学技術への、明るい礼賛を惜しまなかったのである。

1948（昭和23）年3月ころに二畳一間の如己堂に移ってからは、全国から寄せられる見舞状への返信で、彼は科学を学べと強調する。「いつもすがすがしい心で実験を致しましょう」<sup>(36)</sup>、「たとい百冊、千冊、万冊の科学書を読んで覚えていたとてそれは科学者ではなくて、物識りだ。法律をみな覚えている者が道德の正しい人とは言えない。科学者にとつていちばん大事なことは実験だ！ 実験を伴わぬ読書と思索は無意義である」<sup>(37)</sup>、「観る。——（科学の基礎）／つねに新しい心で観る。正直に観る。空想を交えずに見る。大きく全体を観る。小さくくわしく観る。じやま物を取のけて見る」<sup>(38)</sup>、等々である<sup>(39)</sup>。

さらには焼失した浦上天主堂の一部を残せという声に対し、永井は「誤って犯した戦争によって神の家さえ焼いた罪のあとを〔子どもたちに〕見せたくない」と言って反対する<sup>(40)</sup>が、上記の永井の姿勢をふまればこれは、子どもたちには戦争を憎む気持ちをもたせればよいのであって、遺構の保存によって原子力関係の科学まで嫌いにさせてはならないという意味だと解せられよう。

科学技術の発達によって筆舌に尽くしがたい苦難を味わわされたにもかかわらず、早くも被爆半日後から最期まで徹底して科学を礼賛し続けた永井の態度には、よほどの理由があるとみるべきであろう。彼の目には、原爆の猛威が象徴する科学の発達こそ、自分の父母を苦しめ、妻をはじめとするカトリック教徒を圧迫してきたケガレ意識を払拭する、好ましいものと映ったとみられる。つまり原爆の威力によって、科学が急速に進歩してきたことを自覚すればするほど、その科学を人々が学ぶことにより、迷信もケガレ意識も、資源の奪い合いによる戦争もない良き時代が必然的に来ると彼は確信したのである。

この永井のスタンスに立つならば、「浦上燐祭説」の論理を無理なく理解することが可能である。すなわち自分の妻を含む無数の「善い人ばかり」の原爆死は、良き時代を開く尊い礎、すなわち神に選ばれた「犠牲の祭壇に屠られ燃やされるべき潔き羔」の死であった。それゆえに生き残った者の任務は、まずこれらの死者こそ潔く、ケガレがないと最大限に美化して心に刻み（前述の甲辞で彼は原爆死を「潔し」・「汚れなし」と述べているし、純心高女の生徒らが歌いながら信仰に燃えて死に赴いたとする短歌も同趣旨である）、そのうえで「世界一の原子野、この悲しい、寂しい、物凄いの、荒れた灰と瓦の中に踏み止まって、骨と共に泣きながら建設を始め」ること<sup>(41)</sup>だといえよう。片岡千鶴子が指摘する「永井の全作品に一貫する反原爆、戦争反対の叫び」も、この「建設」の一環であろう。

#### d. 「侮辱を甘んじて受ける徳」を説きつつも 苦悩

如己堂で臥床しながら小説や随筆を書きつけた永井は、2人の子どもの私生活を公開したのも同然であった。ここから彼は、著作を通

じて世界平和と原子力の平和利用を叫ぶ。

如己堂への転居後約5か月で永井は医大教授を休職し、収入がままなくなる。それでも彼は「国家に寄食」したくないとして、「食べるために」執筆に励んだ<sup>(42)</sup>。一方で彼は、そうして得た収入のかかなりの部分を教会や長崎市に寄付し、浦上天主堂再建のほか、植樹や学校・病院の整備に貢献した<sup>(43)</sup>。このことは一見すると矛盾しているようであるが、これを彼がいう「建設」だと解釈するとともに、彼が前述の「ケガレたとされる者が気品をもって生きること」を目指していたと考え、一貫性が認められる。

公刊された著書ばかりでなく、一般人からの見舞状への返信も永井は懸命に書いた。その中に次のものがある。「いいえ、カトリック生活を初めてみた人々の方が、慢性信仰になっている信者よりも深く天主の摂理を感じたかもしれませんよ。へりくだりましょう。いつも、ことに未信者の前では己れの信仰のうすいことを自覚してへりくだりましょう。チンドンやのゴツは威張らぬところにあります。あなどり辱しめを甘んじ受ける徳にあります」<sup>(44)</sup>。

永井が別の書簡でも自分を指して、人々を教会にまで導く「町のチンドン屋」だと言っていること<sup>(45)</sup>を考え合わせると、上記の「あなどり辱しめを甘んじ受ける徳」を示す「チンドンや」は、彼が目指した生き方を示しているよう。それでは彼が受ける「あなどり辱しめ」とは何か。著名人になればどうしても受ける誹謗中傷を指すともいえる。しかしこれまでの考察をふまえれば、カトリックに加わることにより、かつて自分の両親が闘った「ケガレ」を帯びた身とされ、それゆえに侮りや辱しめを受けてきた自分が、それらを甘んじて受ける徳を示し、気品ある生き方をしようとする決意だと解釈できる。

しかし永井は、自分の生き方にゆるがぬ自信

をもっていたわけではない。自分が「一つの長崎名物」になってしまったことに苦悩し、その生き方を「低く醜い」・「人生の失敗者」とまで言い切る彼の姿<sup>(46)</sup>は、かえってすぐれた反省力と高度な人間性を感じさせる。しかし自らを卑下せざるを得なかった理由の詳細については、さらに深い検討が必要である。

### 3. むすび

大学教員であり、また高等女学校の教育にも関わっていた永井隆が唱えた、原爆死を神の摂理だと強調する「浦上燐祭説」は、戦争遂行と原爆投下を免罪したという否定的評価と、信仰の論理からみて当然だという肯定的評価のあいだの論争を引き起こした。これを総括して『長崎新聞』は、「永井を通じて社会や思想の多面的な考察を」と呼びかけた。本研究はそれを受け、日本社会の根本問題であるケガレ意識を鍵として永井の思想と行動を再検討した結果、次のことが明らかになった。

幼少期から迷信やケガレ意識と闘う両親の姿を見てきた永井は、これらを払拭するために、(1)ケガレたとされる者が気品をもって生きることと、(2)科学が発達すること、の2点が必要だと考えた。まず彼は、ケガレたとされながら気品をもって生きる姿を浦上カトリック信徒に見出した。次に彼は科学の発達を、たとえ原爆の猛威であろうとも、ケガレ意識を打破するという点では好ましいものと考えた。こうして原爆死を、ケガレ意識のない良き時代を開く尊い礎ととらえたからこそ、永井はこの犠牲を神の摂理によるものと考えたのであった。それゆえ彼は原爆死を「潔し」・「汚れなし」と弔辞で謳いあげ、絵や短歌で徹底的に美化したのであった。以上は、彼のライフ・ヒストリーとそれを取り巻く社会環境から必然的に導き出されたものである。

このように永井を論ずるにあたっては、ケガ



レ意識という日本社会の根本問題を考察に含めねばならないだろう。いいかえれば「浦上燐祭説」は、この根本問題が存在することを今も私たちに提示しているのである。

【付記】本研究は、平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）による「東アジアにおける死生学の歴史社会学的比較研究」（課題番号＝20310152、研究代表者＝金子哲・兵庫大学経済情報学部准教授）の一環である。

## 注

- (1) 片岡弥吉『長崎の殉教者』、角川選書、1970年、98頁には664名、津山千恵『日本キリシタン迫害史』、三一書房、1995年、198頁には613名とある。
- (2) 高橋眞司は次のように述べる。「キリシタンの浦上山里村は、〔諏訪神社の祭礼である〕おくんちにいろいろな出し物をだす踊り町ではないし、キリシタンたちはお賽銭をあげにもこない。長いキリシタン禁圧の歴史のなかで、旧市街の人びとは浦上の人びとを『クロシウ』とか『クロ』と呼ぶようになった。〔中略〕軽蔑と差別の蔑称であることにかわりありません」。高橋『長崎にあって哲学する——核時代の死と生——』、北樹出版、1994年、220頁。
- (3) 本島等は、「差別はずっと前になくなったとみんな思っているが、表面に出ないだけで形を変え、今も残っている」とし、結婚差別の事実を指摘する。横田信行『赦し——長崎市長 本島等伝——』、にんげん出版、2008年、200～201頁。
- (4) 奥住喜重・工藤洋三「解説16. 長崎にF31を投下」、奥住・工藤訳『米軍資料 原爆投下の経緯——ウェンドーヴァーから広島・長崎まで——』、東方出版、1996年、

参照。

- (5) この計数は、高橋眞司『続・長崎にあって哲学する——原爆死から平和責任へ——』、北樹出版、2004年、100頁による。
- (6) 永井隆『長崎の鐘』、『永井隆全集』、講談社、1971年、50頁。高橋眞司も、「〔切支丹禁令高札の撤去後も〕キリシタンにたいする差別意識はなお根づよく残っている。しかも、浦上地区は、長崎市の行政にとって全くの、といってよいほどの新参者でした。諏訪神社とその境内にある恵比須神社、玉園稲荷神社におまいりする旧市街の人びとが、『天罰』ということを思いついても決して不思議ではありません」と述べる。前掲高橋『長崎にあって哲学する』、223頁。
- (7) 片岡弥吉『永井隆の生涯』、サンパウロ、2002年、200頁。
- (8) 前掲永井『長崎の鐘』、50頁。
- (9) 前掲高橋『長崎にあって哲学する』、206頁参照。
- (10) 前掲永井『長崎の鐘』、51～52頁。
- (11) 前掲片岡弥吉『永井隆の生涯』、201頁。ただしP・グリーンは、弔辞朗読の初めの方で、一部の信徒から激しい抗議の声があがったことを記している。Paul Glynn, *A Song for Nagasaki*, Hunters Hill, NSW, Australia: Catholic Book Club, ca1988. (邦訳) パウロ・アロイジウス・グリーン、聖心女子大同窓生グループ訳『長崎の歌』、マリスト会、1989年、263頁参照。
- (12) 永井はこの2点を、小説中の、追悼祭に先立って弔辞原稿に目を通した山田との会話の場面で、次のように表現している。

市太郎さんは読みおわって眼をつむった。

「やっばり家内と子供は地獄へはゆかなかったに違いない」しばらくして呟いた。

「先生そうすると、わし等生残りは何ですか？」

「私もあなたも天国の入学試験の落第生ですな」

「天国の落第生、なるほど」

二人は声をそろえて大きく笑った。胸のつかえが下ったようだ。

「よっぽど勉強せにゃ、天国で家内と会うことは出来ませんばい。確かに戦争で死んだ人々は正直に自分を犠牲にして働いたのですからな。わしらも負けずによほど苦しまねばなりませんたい」

「そうですとも、そうですとも。世界一の原子野、この悲しい、寂しい、物凄いの、荒れた灰と瓦の中に踏み止まって、骨と共に泣きながら建設を始めようじゃありませんか」

「わしは罪人だから苦しんで賠償させて貰うのが何より楽しみです。祈りながら働きましょう」市太郎さんは明るい顔になって帰った。(前掲永井「長崎の鐘」、52頁)

- (13) 秋月は長崎医大における永井の直弟子であったが、もとは熱心な浄土真宗門徒で、永井とは宗教観が対立していた。1953(昭和28)年にカトリックに改宗する(「爆心の丘の【五七五】3 祈りと歌」、『長崎新聞』2001年8月5日付)が、改宗後にも次のように述べた。「幾千と集まった浦上の信者の、死者追悼のミサに出なかったのを私は残念だとは思わない。幾千人の前で、読みあげる慰霊祭文を聞きたいとも思わなかった。私は、永井先生の『神は、天主は浦上の人を愛しているがゆえに浦上に原爆を落下した。浦上の人びとは天主から最も愛されているから、何度でも苦しまねばならぬ』といった考え方にはついていけないものを持っている」。秋月『長崎原爆記』、

弘文堂新社、1967年、164頁。

- (14) 山田かん『長崎原爆・論集』、本多企画、2001年、45頁。この部分の初出は『潮』第156号(1972年5月)で、原題は「聖者・招かざる代弁者」であったが、同誌編集部により「偽善者・永井隆への告発」と改題された。
- (15) 以上、井上ひさし『ベストセラーの戦後史1』、文藝春秋、1995年、60、62頁。
- (16) 前掲高橋『続・長崎にあって哲学する』、102頁。
- (17) 以上、片岡千鶴子「永井隆と『長崎の鐘』——被爆地長崎の再建——」、長崎純心大学博物館磯村平和文庫編、片岡千鶴子・片岡瑠美子編著『被爆地長崎の再建』、同博物館、1996年、74~75頁。
- (18) 以上、「ナガサキの思想と永井隆——没後50回目の夏に——3 信徒への励ましが目的」、『長崎新聞』2000年8月3日付。
- (19) 以上、本島等「浦上キリシタンの受難——禁教令、四番崩れ、原爆——」、『聖母の騎士』2000年10月号、聖母の騎士社、同年同月、7頁。なお「不正義の戦争に勝利があるだろうか」というくだりは、永井が米国への復讐を誓う遠来の客を諭す、小説「長崎の鐘」中の次の場面を指していると思われる。

【永井】「戦争は国家にとって利益をもたらす事業でしょうか？」

【来客】「勝てば利益になるでしょう」

【永井】「自国の利益を目的として始める戦争が正義の戦いでしょうか？」

【来客】「さあ」

【永井】「神の前に正義でない戦いに勝利のあるわけがありません」(49頁)

永井のこのような考え方について本島は、「被害が強調された戦後直後の被爆地で、日本の加害責任にいち早く言及したと

僕は重視している。[中略] 批判精神は今ほどなかったかもしれないが、永井さんは僕たちの先を行っていた」と高く評価する。前掲横田書、236頁。

- (20) 身体と精神に加えられる宗教的迫害をキリスト教徒が神の摂理とし、喜々として受け入れる姿勢を示すことは、このような信仰をもたぬ者には理解しにくい。これについて本島は、自分がまだその境地に達していないとしながらも、「[信徒は] みんなそうなりたいと思っている」と述べる。同書、235頁。
- (21) 本島は次の点を指摘する。「[永井が] 家族を食べさせるため、矢継ぎ早に書いた本には粗さがあるかもしれない。思想的な遍歴がないまま入信し、カトリックの哲学に頼りすぎる浅さはあった」、「なぜ古里の島根を離れて長崎に来たのかなど、わからないことは多い」。以上、同書、235、237頁。
- (22) 「ナガサキの思想と永井隆——没後50回目の夏に—— 5 評価共通する点も」、『長崎新聞』2000年8月5日付。
- (23) この永井の伝記情報は、前掲片岡弥吉『永井隆の生涯』による。以下同じ。

なお永井は自伝的小説とされる『亡びぬものを』で、自分をモデルにしているとみられる林隆吉の家系を次のように書いている。「先祖は一品親王より出で、紋どころは一文字三ツ星である。大江広元、毛利元就たちの身体を遺伝質が通過して、どこからか分かれ、おちぶれて松江藩の薬草園係となり、代々仕えていたが、ある代の男が鍬川上流の、おろちの住んでいたという鳥上山に薬草採取に出かけ、雲深き山里の娘と恋に落ち、いさぎよく両刀を捨てて村人になってしまった。それから幾代かの墓が横田というところにある。隆吉の祖父の文隆は、分家をして上山という村に出て漢方

医を業とした彫刻をよくする人で、木彫のほていなどくろうとの域に達し、小びょうたんに銀の桜を象眼した気付けぐすり容器は、山住みの人の手すさびとも思えぬほど美しいものだった。文隆には一男一女があり、女は大吉寺という山奥の禅寺に嫁し、男は寛とって、これが隆吉の父であった。寛はノブルと読む[後略]」。永井隆『亡びぬものを』、サンパウロ（アルバ文庫）、1996年、5～6頁。

- (24) これが永井の両親をモデルにしていることは、生前の永井と親交があった田川初治による「序文」、永井隆『村医』、サンパウロ（アルバ文庫）、2008年、所収、にある。
- (25) 同書、253～254頁。
- (26) なお永井の生家は出雲大社教の信者であったが、この教団の東京総監であった千家尊宣は、戦後の1947（昭和22）年、文部省迷信調査協議会委員となり、日本の迷信の解明にあたっている。同協議会編『日本の俗信 1 迷信の実態』[復刻版]、洞史社、1979年、18頁参照。
- (27) 重藤威夫『長崎居留地と外国商人』、風間書房、1967年、179頁。
- (28) 片岡弥吉は次のように述べる。

「絵踏にたいする嫌悪の情から、絵踏が終ったあと厄払いをするところが多かった。[中略]

長崎では、小豆をたき、煮メ、なますなどを食膳にならべて酒盛をし、三味を弾き、四ツ竹をならして厄払いとした。家から出て、街を踊り歩く人もあった。三人、五人といっしょに踊り歩くようにもなった。その踊りの中に『万歳舞』などもあったと、故古賀十二郎氏は次のように書き残している。

『これは三河万歳でもなく、また大和万歳でもなく長崎独特のもので、絵踏厄払万歳

とでもいうべきものであった。身には鶴をえがいた素袍のようなものを着て、通常の平袴のようなものをつけているさまは芝居の三番叟に似たいでたちであった。

そして陶製の大黒または、恵比須の面などをかぶり、鳥〔烏〕帽子或は頭巾をいただき、右手に扇を持って、厄払いの文句のようなものを歌いながら、静々と舞う。一人は袖頭巾を冠り、概ね鼠色の紋付を着流しにして、しめ太鼓をトコトコとたたくのであった。

この万歳舞が来ると、家々ではよろこんで迎え入れ、茶菓子などを出し、相応の鳥目を贈るのであった』（長崎市史・風俗編）

このような絵踏厄払いは、絵踏すること、すなわち、聖画像を踏むことを不吉とし、嫌悪する心の表現であった」。片岡弥吉『踏絵——禁教の歴史——』、NHKブックス、1969年、10、107～108頁。

(29) 沖浦和光は次のように述べる。

「差別との関連でいちばん問題なのは、多神教であるヒンドゥー教と、その深い影響を受けた仏教の一派、すなわち密教です。そこではケガレは、甲→乙→丙→丁というようにどんどん伝染していくもの、すなわち、『悪しき生命力をもつ実体』としてとらえられています。接触によって伝染するという点で、ポリネシアの〈マナ〉の観念ともよく似ています。このようなケガレ観念は、十世紀に制定された『延喜式』にはっきりと規定されていますから、かなり早くから日本に入ってきていると考えられます」。沖浦「ケガレとは何か——原論的考察——」（沖浦・宮田登『ケガレ——差別思想の深層——』、解放出版社、1999年、所収）、14頁。

(30) 斎藤茂吉『歌集つゆじも』、岩波書店、1946年、37頁。

(31) 帳方は惣頭（そうがしら）ともよばれるキリシタンの指導者で、潜伏期にはお帳（日繰り・祈り本など）を預かって、一年中の祝い日や悲しみ節の入り、上り等を決めたり、教理やオラショを憶えてそれを各郷のキリシタンの頭（触頭〈ふれがしら〉）に教える役割を果たした。片岡弥吉『長崎のキリシタン』、聖母の騎士社（聖母文庫）、1989年、68～71頁参照。

(32) 長崎市永井隆記念館蔵。

(33) 『長崎純心大学博物館研究第13輯 平和を〜永井隆』、同館、2005年、30、82頁。また長崎市永井隆記念館には、浦上天主堂の廃墟の絵を背景にして「燔祭の炎の中にうたひつつ白百合少女燃えにけるかも」と永井が書いた掛軸がある。

(34) 以上、永井隆『この子を残して』、サンパウロ（アルバ文庫）、1995年、17～18頁。

(35) 同書、217～220頁。

(36) 高崎すみ子（水戸市）あて永井書簡、日付非公表、雲南市永井隆記念館蔵。

(37) 豊島淑美（水戸市）あて永井書簡、日付非公表、同館蔵。

(38) 佐藤順子（水戸市）あて永井書簡、日付非公表、同館蔵。

(39) また永井の親類は「放射きゅう」と称する灸の仕事を始め、「浦上上野町／永井隆方／放射きゅう／一回で良く効く灸」という看板を出す、永井の承認がなければこのような看板をあげられないと思われることから、彼は「放射」を、科学的色彩を帯びた好ましい商標だと考えていたのであろう。『サン写真新聞』1949年3月8日付、雲南市永井隆記念館蔵。なお看板中の「永井隆方」は、わずか2畳で永井が常時臥床していた如己堂を指すとは考えられず、以前に彼が住んでいた仮建築の家があった場所かと思われる。

- (40) 前掲片岡弥吉『永井隆の生涯』、199頁。
- (41) 注12を参照。
- (42) 永井は1949（昭和24）年9月、ついに大学を退職する。そのころの生活について彼は次のように述べている。「いよいよ一本の鉛筆に生活のすべてをかけてがんばります。一日書かざれば一日食わず、という身の上であります 生命懸けを超越した境地にあります」。田野熊一あて永井書簡、1950年1月1日付、雲南市永井隆記念館蔵。
- (43) 前掲片岡弥吉『永井隆の生涯』、213～221頁参照。
- (44) 高野麻葱（大津市）あて永井書簡、1950年9月30日付、雲南市永井隆記念館蔵。
- (45) 永味靖子（京都市）あて永井書簡、1950年1月19日付、同館蔵。
- (46) 前掲片岡弥吉『永井隆の生涯』、260頁。